

貉（抜粋）

小泉八雲

戸川明三訳

『じつじつ、じつじつ、私の言葉を聞いて下さい……二は夜若い御婦人などの居るべき場処ではありません！ 御頼み申すから、お泣きなされるな！——どうしたら少しでも、お助けをする事が出来るのか、それを云って下さい！』徐ろに女は起ち上ったが、商人には背中を向けていた。そしてその袖のうしろで呻き咽びづづけていた。商人はその手を軽く女の肩の上に置いて説き立てた——

『お女中！——お女中！——お女中！ 私のお言葉を聞きなさい。ただちよつとでいいから……お女中！——お女中！……するどそのお女中なるものは向きかえった。そしてその袖を下に落とし、手で自分の顔を撫でた——見ると目も鼻も口もない——きやッと声をあげて商人は逃げ出した。

一目散に紀国坂をかけ登った。自分の前はすべて真暗で何も無い空虚であった。振り返ってみる勇氣もなくて、ただひた走りに走りつづけた拳句、ようよう遙か遠くに、螢火の光っているように見える提灯を見つけて、その方に向って行った。それは道側に

屋台を下していた売り歩く蕎麦屋の提灯に過ぎない事が解った。しかしどんな明かりでも、どんな人間の仲間でも、以上のような事に遇った後には、結構であった。商人は蕎麦売りの足下に身を投げ倒して声をあげた『ああ！——ああ！！——ああ』……

『これ！——これ！』と蕎麦屋はあらあらしく叫んだ『これ、どうしたんだ？ 誰れかにやられたのか？』

『否、——誰れにもやられたのではない』と相手は息を切らしながら云った——『ただ……ああ！——ああ！』……

『——ただおどかされたのか？』と蕎麦売りはすげなく問うた『盗賊どろぼうにか？』

『盗賊どろぼうではない——盗賊どろぼうではない』とおじけた男は喘ぎながら云った『私は見たのだ……女を見たのだ——濠の縁ふちで——その女が私に見せたのだ……ああ！ 何を見せたって、そりや云えない』……

『へえ！ その見せたものはこんなものだったか？』と蕎麦屋は自分の顔を撫でながら云った——それと共に、蕎麦売りの顔は卵のようになった……そして同時に灯火ともしびは消えてしまった。